新刊紹介

大門正克・長谷川貴彦編『「生きること」の問い方』

沢山美果子
（岡山大学客員研究員）

本書の出発点は 10 年前にさかのぼる。それぞれ「いのち」「生存」「福祉」の歴史に関心を持つ日本史、イギリス史の研究者が集まり、以来、年に二回、「いのち」「生存」「福祉」の関係史をめぐって議論を積み重ねてきた。本書の特徴は、何よりも、その 10 年間の蓄積を踏まえた共同研究の成果として編まれた点にある。

その書名として『「生きること」の問い方』が選びとられたことには二つの理由がある。一つは、「いのち」「生存」「福祉」は、「生きること」にとっての切実な課題であり、生を支える関係性に注目する必要があること、二つには、歴史のなかの「生きること」を、生きた人々の側から明らかにするには、その「問い方」、言い換えれば、過去に生きた人々の痕跡である史料を今を生きる自分が読むことに留意した史料読解が鍵になること。この二点に議論が収斂していった点にある。

本書の「序論」では、編者である大門正克が、なぜ今「生きること」なのか、なぜ「生きることの「問い方」」なのかを論じる。大門は、自らが提唱した「生存の歴史学」が、新自由主義とグローバル化の進行という時代状況に対して持った意味を振り返るとともに、歴史学のなかで、どのように「生きること」が主題化していったのか、とくに 1990 年代以降の日本の民衆史研究の成果、「生きること」に焦点をあてた近年の西洋史研究を分析する。さらに歴史学のみならず、2000 年以降の「生きづらさ」をめぐる議論なども射程に入れて検討することで、「「生きること」の問い方」の課題と方法を示す。

続く本論は、幕末・維新期から高度経済成長期以降の現代までを対象とし、二部構成で展開する。二部構成としたのは、維新期、戦時期、高度経済成長期という、巨大な社会変動を含む長い時代の歴史的転換の意味を、そこに生きた人々の側から明らかにするためである。また、それぞれの議論を日本史の枠内にとどめず開いていくために、部の最後に、編者であるイギリス史の長谷川貴彦による、日本とイギリスを比較する「論点」を置いている。論点 1「近世から近代を生きる」、論点 2「新自由主義の物語を超えて」というタイトルは、比較の軸足がどこに置かれているかを明確に示す。

本論の内容は、次の通りである。

第 1 部「近世から近代へ」

第一章「女・子どもの「いのち」を守る社会的紐帯の形成」（沢山美果子）、 第二章「「結社の時代」を生きる」（大月英雄）、第三章「近代民間福祉の出発」（大川啓）、第四章「近代日本を漁業出稼ぎで生きる」（中村一成）

第 2 部「近代から現代へ」

第五章「東北大凶作を生き延びる」（鬼嶋淳）、第六章「生きる術としての示威行動」（佐々木啓）、第七章「山間の地で生きること」（高岡裕之）、 第八章「共同的記憶が創る「民主主義」」（倉敷伸子）

第 1 部では、女・子どものいのちを守るための社会的紐帯のあり方が幕末から近代初頭にかけてどう転換したのか（一章）、明治 10 ～ 20 年代の「結社の時代」、地域における人々の生活を支える仕組みは明治維新でどう変わり、そこにはどのような地域社会の意志があったのか（二章）、明治中後期の「民間福祉」の出発点において、富者が地域福祉を支えざるを得ない状況がどのように生み出されたのか（三章）、出稼ぎによって生きる人々は、地元と出稼ぎ先を移動しながら、どのように生を繋いでいたのか（四章）など、近世から近代への転換の時期を対象に、多様な視点から「生きること」の内実と意味を探る。

第 2 部では、凶作下の農民と地域の側から見たときの 1930 年代前半の東北大凶作のもとでの「生きること」と、そこでのせめぎ合いとは（五章）、敗戦直後の食料不足を背景に広がった「食料闘争」に参加した人々は、自らの行動の正当性をどのように認識していたのか（六章）、ポスト高度経済成長期の過疎の農山村地域の住民と地域の側から見る時、農業は、なぜ、どのように「生きるための手段の一つ」であったのか（七章）、高度経済成長を経たあとのムラの選挙に関わった人々への聞き取りからは、どのような人々の紐帯と、ムラの「民主主義」が浮かびあがるのか（八章）など、地域に生きた人々と地域の側から、近代から現代までの「生きること」が、様々なせめぎ合いにも留意しながら描き出される。

歴史のなかに「生きること」を問うことは、いかにして可能か。本書は、この課題に迫るために、多様な角度から、日記、結社文書、行政文書、新聞記事、裁判関係史料、ルポルタージュ、報告書、地域の広報紙など多彩な文書史料、

そして聞き取ったことも含めて読み解く。史料の読み解きにあたっては、史料が作られる場に働く権力関係に留意するともに、一つの物語に収斂させることなく、物語に収まりきらない断片を拾い上げ、彼／彼女らの声を掬いとることにも注意が払われる。あるいは、聞き取りでは、同じ制度に統治され、同じ言葉を使い、同じ生活水準にある人が、その制度や言葉への理解を共有しているとは限らないことへの留意がなされる。

それぞれの論文の「生きることの「問い方」」は、取り上げたテーマとも関わって多様である。しかしそこには共通する三つの視点がある。一つは、歴史の現場にたち、歴史のなかに生きた一人ひとりの側から、生の構造と主体が絡み合うプロセスを通して、人々の「生きること」の歴史的現実を探ること、二つには、史料が作成される場に働く様々な力学にも留意しつつ史料を読み解き、史料の背後にいる、そこに生きた人々の息遣いや生きることへの願望をも含めて人々が「生きること」にどう向き合ってきたかを探ろうとすること、三つには、史料読解に際しては、今を生きつつ過去を問う自分自身の位置について自覚的であること、この三点である。

ご多聞に漏れず、本書も最後のまとめの段階に入って、コロナ禍に見舞われ、研究会の場に集まって議論をすることは叶わなくなった。原稿検討段階から研究会に参加してくれた編集者も在宅勤務を余儀なくされる事態となった。しかし、お互いの原稿を共有し、コメントを送りあったうえで、ZOOMで互いの顔を見て議論をするプロセスを経て、ようやく刊行まで漕ぎつけることができた。

私事になってしまうが、この10年間、年に二度の本研究会で学んだこと、培われたことは言葉に尽くしがたい。そして、本書のテーマが「生きることの「問い方」」に収斂していったことと、研究会メンバーの一人ひとりが10年間の歳月のなかで「生きること」をめぐる問いに向き合ってきた過程は、切り離し難いものとしてある。その意味で本書は、読者の方々それぞれに、歴史のなかに生きるとは、生きづらさの背後にあるものは何か、そうした様々なことを考えるきっかけを与えてくれるのではないかと思う。コロナ禍のなか誰もが先の見えない不安にさらされている今、歴史をふりかえり記憶を紡ぎ直すことの意味を探る本書を、多くの方に手に取ってほしい。また、そのことを契機に、さらに読者の方々との議論が展開すればと、切に願っている。

（2022年、日本経済評論社、 364頁、 5170円）